

実習報告（基盤教育実習）

子どものひとりひとりの居場所づくりのために
ー交流学級での子どもに焦点をあててー

待鳥 美奈（子ども支援探究コース）

【探究実習のテーマと設定の理由】

私は大学4年生の時に小学校の特別支援学級にボランティアに行っていた。そのときに、交流学級での子どもの様子を知る機会があった。特別支援学級ではとても楽しそうに活動をしていた子どもたちであったが、交流学級ではクラスの子どもたちとの関わりが少なく、特別支援学級とは違った姿をしていた。私は、交流学級では一緒にいる時間が限られてしまう、そのため他の子どもたちとの距離ができてしまうのではないかと考えた。しかし、学級に居場所がない、自分が受け入れられていると感じられないという事は、本人にとってはとてもつらいことではないだろうか。また、いじめや不登校などの二次障害につながる可能性も考えられる。交流教育は限られた時間しか一緒に過ごすことができないという課題はある。しかし、それを乗り越え交流学級において子どもが居場所があると感じられるようにするための居場所づくりの在り方について探ることを目的としている。

【探究実習の研究目標】

交流学級における居場所づくりの在り方を探る。

- 交流学級での実態を知る。
- 交流学級担任と、特別支援学級担任の連携の在り方を知る。
- 特別支援学級の理解・啓発のための取り組みを知る。

【探究実習の概要】

X小学校は、複数の特別支援学級や通級指導教室が設置されている中規模校であり、平成28年度 of 教育課程の重点目標として特別支援教育の充実が挙げられている。

実習では、「交流学級における居場所づくりの在り方を探る」というテーマのもと、主に通常学級に入りそこに交流教育として交流学級にやってくる特別支援学級在籍の子ども（以下支援学級児とする）の支援を行いながら様子を観察・記録した。観察の視点としては、支援学級児と交流学級の子どものとの関わり、支援学級児と交流学級担任との関わりに焦点を絞り観察を行った。

①支援学級児と交流学級の子どもの関わり

交流学級での支援学級児の姿は様々であった。周りの子どもとの関わりが少ない子もいれば、積極的に他の子どもと関わっている子どももいた。2年生のAは、特別支援学級では自分の意見などを積極的に発言していた。しかし、交流学級で過ごしているときには特別支援学級で過ごしているときと比べて大人しいように感じた。一方、4年生のBは20分休みや昼休みには必ず交流学級の友達と遊んだり学年行事では司会をこなすなど、積極的に交流学級にかかわろうとする姿が見られた。

②支援学級児と交流学級担任の関わり

通常学級では、支援学級児以外にも気になる子どもが多く存在し、学級担任には広い視野と子どもひとりひとりに柔軟に対応する力が求められると感じた。また、そういう状況の中でもしっかりと支援学級児と向き合っている交流学級担任の姿を見ることができた。例えば、2年生のCの交流学級担

任からはCへの対応について「この課題でCはここまでできているから次はこうしてほしい。」というような助言を受けた。子どもの様子をしっかり見ていることが十分に伝わってきた。

また、メンター教員が作成した時間割に従ってすべての学級に入ることができたので、支援学級児以外の子どもとの関わりも多く持つことができた。さらに、通級指導教室(言語障害通級指導教室, LD・ADHD 等通級指導教室)の授業を参観する貴重な機会を得ることができた。

【探究実習の成果と課題】

○成果

交流学級での実態を見ていくなかで、支援学級児はある意味守られていると感じた。なぜならば、特別支援学級担任が学習面、生活面の丁寧な指導を行っているからである。さらに、交流学級ではその子どもの困難さをまわりの子どもがカバーしてくれる、またできなくても許されるような雰囲気ができているように感じた。ただ、高学年になるにつれてどの子どもも自分と他人との違いを理解できるようになるので、交流学級担任は周りの子どもが支援学級児を学級の一員として受け入れるような学級経営をさらに心がけていかなければならないと思った。また、低学年と高学年では子どもの学習活動の形態や内容に違いが見られるため、教師の指示の内容や量も変わってくる。このように、子どもの特性はもちろん学年の発達段階の違いにも応じた支援が必要になるという事が分かった。

交流学級に馴染んでいる子と、そうでないように見える子どもがいた。しかし、それは子どもの社会性の発達の違いによるものであり、そこに「いる」ことに意味があるということが分かった。そのため、交流学級のなかで周りの子どもとの関わりが少ないからといって、支援学級児が居場所がないと感じているとは限らない。「居場所がある」ことを「安定した人間関係がある」(良い面悪い面を含めて相手を受容できる関係)と考えていたが、小学校段階では安定した人間関係を持つことが難しいという事に気付いた。

○課題

この実習を通して、交流学級での実態を知ることができた。子どもの世界での「居場所」とは何かという事を、人との関わりの視点からもう一度考えていく必要があると思った。そのために、実際に支援学級児が交流学級でどのようなことを感じているのか、安心して過ごせているのかなどについて踏み込んで調べていきたい。また、支援学級児を受け入れるような学級経営の在り方や、子どもの特性や学年に応じた支援方法などについても考察をしていきたい。

この研究では、支援学級児に焦点を当てて居場所づくりについて考えてきた。しかし、実習を通して通常学級で気になる子どもの居場所づくりについても考えることが必要だと思った。なぜならば、支援学級児は学習の保障がされており、また障害による困難を改善・克服するための支援を受ける事ができる。さらに、特別支援学級担任との間で信頼関係を築くことは比較的容易であり、そうすることで学校での居場所を確保することはできる。しかし、通常学級で気になる子ども、例えば授業中に教室から出て行ってしまう子どもなどに十分な学習の保障がされているとは言い難い。さらに、その特性を担任が理解していたとしても、一斉指導の中でその部分を個別に指導をしていくという事は難しい。実習中にも、支援学級児の観察・支援よりも、その他の気になる子どもとの関わりや支援が多くなることが度々あった。また、その特性により関わり方が難しい子どもの場合は、担任との間で信頼関係を築くことが難しい場合もあるかもしれない。

このようなことから今後は、支援学級児だけでなく通常学級の中での気になる子どもも視野に入れて居場所づくりについて考えていきたい。